

学位論文題名

『今とりかへばや』の研究

—引歌表現を手掛かりとして—

学位論文内容の要旨

本論文の内容は以下のとおりである。

【第一章・はじめに】

『今とりかへばや』が登場したのは、王朝物語最盛期を遙か昔とする時代である。このような物語の引用論に不可欠なのは、その典拠と物語自体との時代的間隔に対する視座であろう。なぜなら、典拠との時代が隔絶した表現は、多数の先行作品にても引用され、その間に類型化し、物語創作ならびに享受者間に「共通理解」を構築してきたことも予測されるからだ。したがって、引用の背後にある「共通理解」の把握、加えて「共通理解」自体と当該物語での引用利用箇所との比較、検証こそが重要なのである。

さて、上記を踏まえつつ、本申請者が特に注目したのが引歌表現である。同表現には、まさにこの「共通理解」の問題が潜むのにも拘らず、今まであまり論述の対象とならなかった。本論は、この引歌表現を手掛かりに、『今とりかへばや』が、先行作品の何を継承乃至排除、変質させて自らの世界を描き出したかという問題を明らかにしようという試みである。

【第二章・「共感」の利用としての引歌表現】

1、「誰も千歳の松ならねど」・「後れ先だつ末の露」・2、「志賀の浦」・・・先行物語における引歌表現は、人物間の「心的連帯」を結ぶものであった。しかし、『今とりかへばや』では内心を隠す演技のことばでしかなく、内面と外面の不一致という問題が浮き彫りとなる。引歌利用による「心的連帯」の世界は、異性装の女君と男君の演ずべき世界なのだ。

【第三章・宰相中将という「男」—引歌表現の問題から—】

本章は、宰相中将の恋を彩る引歌表現を考察し、彼の恋を物語史に位置づけたもの。

1、先行物語への意識—「逢ふ人にしも飽かぬ夜を、まいてはかなう明けぬなり」—・・・『今とりかへばや』における引歌表現は、先行物語での用法を多分に意識し、その上で独自の世界を築くべく利用されている。

2、読み替えによる「二心」の描出・・・宰相中将の恋に利用される引歌表現には、先行例の意味合いをずらし、彼の二心を強調したものがある。先行および同時代の例では、一人の「女」への激情を表した表現は、宰相中将においては、二人の「女」に心を分ける二心を顕にする修辞へと変容する。また、表現によって描かれた先行物語の「男」のイメージをずらし、宰相中将の不実性を茶化していく技法も確認される。

3、投げ出される恋の苦悩・・・先行作品で恋の苦しみを描出した表現が、宰相中将の場合、出現直後に忘れ去られてしまう。先行作品に倣って表されるかのような彼の恋の苦しみは、結局空疎なものであることが暴露されるのだ。

4、ずらしによる「惑乱」の強調・・・一見類型表現とも考えられる表現も、それが用いられる前提を吟味すると、宰相中将には過剰な言い回しであることが分かる。つまり、これらは先行物語による「共通理解」を逆手に取った、惑乱の強調の手法なのである。

5、歌題の利用・・・宰相中将の恋は歌題流用の語で表されることで、和歌的世界に添った観念的恋世界の内に収まる。そこで注意すべきは、その恋は忘れられるものとして存在することだ。和歌的世界によって表現された宰相中将の恋の形骸化といえよう。

6、宰相中将の沈黙・・・様々な引歌表現でもって自らの恋の苦しみを表してきた宰相中将は、予想外の苦しみの前に「沈黙」する。つまり、その苦悩を投影すべき和歌的世界をも「喪失」するのである。この「喪失」は、結果的にかつて彼が引歌表現を用いて描いてきた恋物語が、空疎であったことを暴露する。

7、その後の宰相中将一恋物語の復活・・・「沈黙」を続けていた宰相中将は、再び物語の表舞台に戻るにあたり、引歌表現をも復活させるものの、これにもやはり先行例とのずれが確認される。引歌表現の復活は、取りも直さず彼の恋物語の形骸化を呼び起こす。

8、宰相中将における引歌表現が表すもの・・・宰相中将の恋は先行物語を表面上継承しながらも、混ぜ返され揶揄される。彼は先行の恋の「パロディ」を体現した存在なのだ。

【第四章・女君における引歌表現—女君の造型と関わって—】

1、克服されるものとしての恋物語・・・恋の苦悩を克服する「女」である女君を、引歌表現を手掛かりに物語史上に位置づける。

2、「憂きも憂からず」・・・一見相違する文脈上の同表現利用は対比関係を生み、女君の心境の変化を浮彫りにする。そこからは、彼女の現世への執着が明らかとなるのだ。

3、「心の闇」・・・先行物語では広く使われる表現を限定的に用い、なおかつそれを女君において否定することで、彼女が「乗り越えたもの」を明確にし、彼女の「女」としての特殊性を浮き立たせている。

4、女君の論理・・・以上の結果、女君の現世志向が明らかとなる。彼女にとっての〈女の物語〉とは、乗り越えられるものとして設定されているのだ。

【第五章・結末としての「国母」】

1、熱烈な帝の「恋」・2、描写されない恋する「帝」・・・女君の結末は「国母」である。ここから物語の王権志向が明らかとなるが、この「王権」とはいかなるものか。これを解く鍵が「帝」の描かれ方にある。この帝は帝でありながら、恋する者として臣下の「男」の如き行動をとり、引歌表現もその熱烈な恋心を描出する。だが、にも拘わらず彼は「帝」の面ばかりが強調され、「男」としての魅力は問題とされない。これは先行物語に比しても特異である。つまり、帝の恋は女君の栄達に利用されるばかりであって、帝と女君の物語には「男」「女」の恋の要素が排されているのだ。

3、「男」「女」の恋物語の「パロディ」として・・・あくまで恋の要素を排した女君の栄達は、「男」「女」の心の追求を旨とする先行物語の「パロディ」といえる。よって、この物語の志向した「王権」も、その意味にのみ位置づけられている。

【第六章・おわりに】

以上のことから、この物語は、先行物語が描いてきた世界を引用しつつも、言葉上の遊戯の如く混ぜ返し、反転させていることがわかる。つまり『今とりかへばや』は、先行物語が追求したテーマ、ならびにその世界を構築してきた言葉達を「パロディ」化していった物語と考えられる。それは、言葉によって築かれ共有されてきた、文学の中の「王朝文化」の相対化にも繋がるものである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 後 藤 康 文
副 査 准教授 長谷川 千 尋
副 査 准教授 押 野 武 志

学 位 論 文 題 名

『今とりかへばや』の研究

－引歌表現を手掛かりとして－

審査の方法および経過

- 第 1 回 審査委員会(平成 22 年 12 月 17 日) 日程調整および査読の開始。
第 2 回 審査委員会(平成 23 年 1 月 12 日) 論文内容の検討と質問事項等の整理。
第 3 回 審査委員会(平成 23 年 1 月 19 日) 口述試験の実施および試験内容の検討。
第 4 回 審査委員会(平成 23 年 1 月 19 日) 学位授与の可否判定および意見交換。
第 5 回 審査委員会(平成 23 年 1 月 24 日) 審査報告書案の作成と検討。
第 6 回 審査委員会(平成 23 年 1 月 26 日) 審査報告書の確定。

審査の概要

1) 本論文の観点と方法

『今とりかへばや』とは、院政期に成立しその後散逸した『古とりかへばや』の改作であり、今日一般に『とりかへばや物語』として享受されている平安朝最末期の作品である。その最大の特徴は、権門の異母兄妹が社会的性を交換して生き、後にもとの性に復するという奇抜な趣向にあるといえ、従来の研究においてもこの点が最重要視され、その意図や意義の追究に力が注がれてきた。

こうした流れの中で、本申請者が着目したのは、この物語における引歌表現の先行作品をパロディ化する用法であった。『今とりかへばや』は、『源氏物語』や『夜の寝覚』などと同じ引歌を用いながらあえて異なる意味を担わせることによって、それら先行作品が築きあげ『今とりかへばや』の享受者たちも期待するであろう世界を面白く裏切ってみせる様を、本文(主として宰相中将と女君をめぐる)を詳細に検討する作業を通じて浮き彫りにし、この物語の本質や文学史的意義を問おうと試みるものである。

2) 当該研究領域における本論文の研究成果

本論が取り上げた『今とりかへばや』の引歌表現の独自性は、従来の研究の網の目からはこぼれ落ちていたテーマであり、そこに着目した本申請者の炯眼をまずは高く評価すべきである。

う。さて、そうした切り口をもって著された本論は、先行する数々の王朝物語作品に畏敬の念を払いつつそれらを従順に踏襲するかに見せかけておいて、享受者との間に形成された「共通理解」をみごとに裏切ってみせる手法を、宰相中將や女中納言(女君)の人物造型と絡めて鮮やかに闡明しているといえる。すなわち、本論の成果は、これまでの『今とりかへばや』研究に新たな角度から照明をあてて新境地を拓き示した出色の論というに値するのである。

もっとも、その筆力のあまりか、「引歌」の厳密な認定よりも論理が優先しているかに感じられる箇所が認められたり、「形骸化」「茶化す」「無化」等々、結論部に用いられるタームのやや安易な使用に不安が残るなど、今後さらに熟考を必要とする課題も残されてはいる。しかしながら、そうした不備を考慮に入れてもなお、本論の価値はきわめて高いと判断しなければならないのである。

3) 学位授与に関する委員会の所見

以上のような審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。